

屋上の米作り

—日常の部活動から—

品川区立小中一貫校日野学園理科部

1 はじめに

日野学園理科部は、毎年、日常の活動の中で、米を作ってきた。

学園の屋上に長さ12m、幅2mほどの水田が2面ある。右の写真は5月中旬の田植えする前。水が張ってあるだけで、何もはえていない。それ以前は、草が伸び放題で荒れた状態だったのを、草取りをして、肥料を入れて、耕したのである。



2 田植え

5月下旬、天気のいい日に田植えを行った。ちなみに苗は新潟の農家に分けていただいた、コシヒカリ。

素足で田んぼに入り、足は泥だらけになってしまう。転ぶと、目も当てられない。この作業で感じたことは足が泥沼にはまって作業がしにくかったことである。植えている人の前にあるひもは、苗を植えるときにずれないように、きちんと整列して植えられるようにするためのもの。まわりの人は、田植えがスムーズに行われるように、苗をほぐして小分けをしている。



3 イネの成長

最初の頃は苗が細く、育つかどうか不安で、雨や曇りの日は、このまま根が腐ってしまうのではないかと思った。しかし、晴れの日には、苗が日光を浴びて、太陽のエネルギーでどんどん苗の成長に代わっていく感じがした。そして、日を追うごとに、苗はすくすくと育っていった。僕たちは、毎日田んぼのある屋上のドアを開けて、田んぼを見て、苗の成長を見守った。

そして、半月たった頃には、イネは茎を増やしていき、緑生い茂る草原のような水田になった。最初、苗を植えたときには考えられないようなたくましい成長ぶりである。茎の太さもだいぶ太くなり、かなりしっかりしてきた。



僕たちも、か細い苗の頃のようなすを思い返すと、このまま成長して、稲刈りまで無事にいってほしいとメンバー全員で話合った。

今年の夏は大変蒸し暑く、人間にとっては過ごしにくい日々が続きましたが、イネが成長することを考えたら、うれしくなった。



4 雑草、害虫

7月になると、雑草が次々に生えてくる。雑草は見つけしだい、手で抜いているのだが、中にはイネと見分けがつかず大きくなるまでそのままになってしまうものがある。昆虫の擬態のように、本当にそっくりで、見分けられない。

また、田んぼには、動物も棲み着く。右の写真は田んぼにいたヤゴの抜け殻。稲を食べるわけではないので、いても、別にいやではない。しかし、害虫と思われる蛾の幼虫が大量に発生したのは、参った。これは、毎日、駆除した。駆除の作業は、虫がきれいな人はいやがるので、なかなか進まない。でも、農薬を使いたくなかったので、毎日、少しずつ手でとった。多い日には200匹、少ない日でも100匹ぐらいはとった。

夏の日差しを受け、いくつかの台風も無事に乗り越えて、稲がすくすくと成長するのは僕たちの楽しみだった。



5 実り、スズメの被害

そんな8月のある日、稲の穂が出た。花が咲いていることもわかった。花は小さくて目立たないながら、ちゃんとおしべ、めしべがあった。モミの中のめしべでは、はじめはどろどろとしたデンプンが、徐々に固まっていく。やがてモミは緑色から黄金色に変わり、ふくらんで、固くなった。

その頃、屋上のドアを開けると、100羽以上のスズメがいつせいに飛び立つ、という光景が目につくようになった。せっかく実り始めた米をスズメがどんどん食べてしまう。そこで、防鳥ネットを張って米を守ることにした。鳥はネットにおびえたのか、全く寄りつかなくなった。

稲刈りは9月下旬に行った。収穫予定の10日前から水を落とし、土を乾かしておく。左手で稲を一束つかみ、右手の鎌で、ぱっさりと切り取る。結構力がある。しかし、収穫できるのは楽しみなので、みんなで鎌を奪い合うようにして、稲刈りをした。



6 おわりに

できた米は校内で、脱穀し、その後、米屋さんで、精米し、給食の食材にして、学園の800名の児童生徒みんなでもいただいた。

あんなに苦勞して作ったのに、たった1回の給食で食べてしまうのでは、もったいないような気もしたが、無農薬の手作りのご飯はさすがにおいしかったので満足である。